

右 に 廻 る も の  
神話的視野から見える女性

春日井 真 英

Person, who steps toward right.  
(Womanstudies from Mythical aspects.)

Shinei KASUGAI

It is said that there was a woman, who was named Lilith, before Eve appears in the Old Testament. This first woman was built from dust by the God at the same time as Adam was built. The woman was supposed to be Adam's nice partner, but Lilith ignored the order of the God, and she left the place, where the God prepared for them to stay. So the God had to make Adam's new partner Eve, this time from Adam's rib. One of the characteristics of Lilith was her fertility, it is said that she had many children (demons), but by refusing the order of the God to return and stay with Adam, she had to lost a hundred children in each day by the punishment of the God. And she vowed to inflict harm on infants of men. We can say that Lilith's fertility is one of the characteristics of the Great-mother, or Terra-mater, at the same time she is known as a child slayer and destroyer, on the other hand she is a catering mother to children. It is easy to illustrate her characters, but an important point is that her activities were all based on her free wish, independent to the God, also independent to man.

Lilith was independent, fertile and at the same time she was a terrible mother. But this fearful character was not only Lilith's. We find the same natures in the story of Hāritu (〔鬼子母神〕 Woman, who appears in the Buddhist legends) and Japanese Goddess Izanami (イザナミ). I believe that Lilith's behavioral patterns are very important factors to think about contemporary women in this age of feminism. From this perspective, I try to extract and describe the woman figures of these days, using the poems, mainly of Miyuki Nakajima (中島みゆき). And from her poems I come to conclude that the natures of women are not changed since Lilith or other goddesses were described. Not only contemporary women possess the same characters but these are, may be I can say, unaltered and would be reserved by the women from long long ago. If they lost or changed this Lilithness, then women would be not women at that time.

男には男のふるさがあるという  
 女には女のふるさがあるという  
 なにも持たないのはさすらう者ばかり  
 どこへ帰るのかもわからない者ばかり  
 愛よ伝われひとりさすらう旅人にも  
 (旅人の詩)<sup>(1)</sup>

私はあなたを傷つける者  
 誰よりあなたを傷つける者  
 けれども唯一癒せるすべを  
 それとは知らずに持っている者  
 「炎と水」<sup>(2)</sup>

### はじめに

昨年来、リリスと呼ばれる始元的女性<sup>(3)</sup>を巡りいろいろと論じ会う機会があった。しかし論じて行くにつれ概論的な話に終始し、互いにその論じる基盤が不明確なことから論点を噛み合わせるのが難しくなった。旧約聖書に登場するイヴより先に神によって土から創られたこの女性はアダムにとって良き伴侶とはならず、自由に思いのままに行動し、また神によって暮らすべく定められた地を離れたため、神はアダムのために彼の左の肋骨からイヴなる女性を創られたとされている。神に背き、夫にも従わなかったリリスと呼ばれるこの世に初めて創り出された女性の問題は単なる物語と見る以上に、女性問題を考える上で大きなヒントを与えてくれると言える。

このリリスをここでは始元的、象徴的女性と位置づけようとするのは註(3)で引用しているように多くの子供(註では悪魔となっている)を生んだにもかかわらず、アダムを呪いの言葉とともに残し去っている。このリリスの姿に彼女の自由奔放さ、さらには何にも囚われることのない姿勢を見て取ることが可能になる。神話的位置づけとして彼女は神によって創られたにもかかわらず、悪魔として位置づけられている。多産で自由に生きようとする女性像を神話的、あるいは宗教の教学的立場で悪魔として位置づける見解には問題を感じる。

男性と女性が互いに相容れない存在でありながら、互いに求め合うということは大変に矛盾する。だからこそ旧約聖書ではイヴと言う女性が男性の左側の肋骨より創り出され、男性から作り出されたものであることからイヴに象徴される女性は男性に対して従順であれとキリスト教世界では求められてきたという。また仏教でも女は女として悟りを開くことができないなど教学的に性差別を有していることはすでに自明のことである。しかし、リリスの場合は彼女と

アダム、あるいは創造主の求める基盤が異なることが出奔の原因と理解したい。そしてそこにこそ女性論の問題の本質が秘められているのではないかと考えてみたい。中島みゆきの「旅人の詩」、「炎と水」から理解することができるように男性と女性が本質的に、互いに相容れないながらも求め合う存在であることをこれらの詩が象徴的に示していると言える。



性差別という問題は歴史的には古代から存在したと言われている。しかしここではその歴史をたどる時間はない。ただ、歴史的に15世紀のクリステイヌ・ド・ピザンが『女の都』<1404><sup>(4)</sup>で男女の能力の平等とそれを保証する教育の平等の要求が主張し、以後女性解放に向けての動きは1960年代のウーマン・リブにそして階級支配に対し性支配を重視するラディカル・フェミニズムの運動を引き起こしてきている。そして、この活動は客観的に見ていく限りリリス的女性の存在を容認する動きと見ていくことが可能であるとともに、これまで存在したと幻想する家族あるいは家庭のあり方まで覆すものになりうることになる。

歴史的な流れの中で女性解放、フェミニズムの動きは多岐にわたって急激に展開している。だが、精神的に（筆者のように）この激しい動きに対応できない人間が多いのも事実である。社会的に、政治的に多くの女性が進出してきたことで変化した事柄、及び女性自身の社会的、政治的意識について扱うには筆者には荷が重すぎる。ただ、ウーマン・リブからラディカル・フェミニズムの潮流にのっている女性自身を考察する手がかりを探して見たいと考える。そのように男の目に映る、現象としての女性をその意識面から模索し、フェミニズムあるいは女性解放という視点とは異なった側面からの女性論を展開する方法を模索してみたいと考えている。言うならば社会的あるいは政治的な女性解放運動という肉体の外側の動きに対し、それらに未だ十分に内面的に対応できていない人々を可能な限り対象とし、思想的潮流と現実のギャップに直面する人々のいらつきを考察し、現代に生きる女性像を浮かび上がらせたい。結果として最終的には女性解放の問題に行き当たり、政治、社会等の諸々の問題とも密接に関わり合う事になるかも知れない。しかし、ここではそれらを事実として受け入れながら、その第一歩としてそのような柵（しがらみ）の中において、それと格闘している一人の女性としての中島みゆきの詩から現代における女性を見ていく手段を模索しよう。当然のことながら、なぜ他の歌手ではなく中島みゆきなのかと問われるであろう。その理由は彼女の詩が実に象徴性に富み、ゆたかな女性像の内面を様々な形で顕わそうとしているからと弁解しておきたい。そのためには彼女の唄をお聴きいただきたいのだが……。



ところでリスの形容でもちいた始元的女性という表現にはいくつか問題があると考え、しかしこれを（見解の相違をおそれずに）「自分らしさを探す」生き方を求める人の象徴と理解しておきたい。だが、この「自分らしさを探す」事と本来的に女性が有している「生む胎」としての女体の存在は「(女にとって) 自分が自分らしくあるための」必要十分条件たるものを求めて行かなくてはならなくなるのは必然と言わねばならない。また同時に無視できないことはリス自身が「生む胎」として存在（註で引用してあるように、主の命令で彼女を捜し回った天使が毎日彼女の子供を百人殺すと脅迫している事からも判るように彼女は多産を象徴する存在でもあった）しながら、人間の赤子を苦しめる力を有していることである。つまり、自分自身は「生む胎」として機能しながらも他者が「生む胎」として機能することを拒む姿勢を示している（神の気に入らなかつた点はまさにそこではなかつたのかと考える）。それは他の存在を否定する行為でもある。このような姿は仏典に見る鬼子母神のみならず日本神話に顕れるイザナミの場合とも合致してくる。鬼子母神（ハリテイー）はたくさんの我が子を有しながらも、他人の子を食べることによって他者の存在を否定し（註4参照）ていることを象徴的に示している。日本神話のイザナミは大八洲をはじめとする大地を生み（国生み）、さらには諸々の神々を生みだす大地母神的性質を顕わしているが、火の神カグツチを生むことで死に、黄泉の国の住人となる。この後の諸々の神々の誕生は男神イザナキに引き継がれていくが、それに先だつて女神イザナミと絶縁しなくてはならなくなる。詳しいことはここでは省略するが、二人の神は黄泉の国と人間界の境のところにあり、「千曳の岩」を境に絶縁し、イザナミは死をつかさどる冥界の神となり、自分のおぞましい姿を覗き見たイザナキに対し

「日に千人の人間を縊り殺す」と宣言し、

「ならば日に千五百人の子供を産もう」とイザナキは答えたとされる。

イザナキは男神でありながら黄泉の国から戻って橋の小門で身を清め穢いながら諸神を生んで行くが水を媒介としながらイザナキ本人の身体から誕生させているところは、生む胎としてのイザナミとは本質的に異なる存在と見なくてはならない。

リスの場合も、仏典の鬼子母神、日本神話におけるイザナミに共通している点は他者を否定するということにあり、「生む存在」でありながら、他者の大事な存在（子供）を奪い去る者と言うところで、この三者は共通している。

リスの場合も、鬼子母神あるいはハリテイーさらには日本神話のイザナミのケースでも共通する部分はともに多産であり、地母神的性格を有していると言うことであるが、多産である故にその素となるべきもの、言い換えれば生ませる存在を獲得しなくてはならないと言う現実

に向き合わねばならないことになる。そういう意味では「女性論」を扱うことは逆に女性の立場からの「男性論」あるいは「男性観」を扱うことになり、「性」に対する問いが生まれてくることになる。また、「性」という問題はジェンダーにかかわる問いをもたらしてくる、それ故にこの問題は常に諸刃の剣として顕れ、大変扱いにくいものになる。しかも女性・男性に対する視点には「宗教的側面」と「神話的側面」などがその優位性を論じる、理論的根拠として見え隠れしてくる。それも中世や近世に限らず現代においてさえもである（この論でも神話的、宗教的論拠を援用しているが）。これがはたしてどこまで通用するものなのかと言う問いかけは別として、これから考える「女性論」あるいは「女性観」にも常に同様の問題が関わってくることは否定できない。そのことは、仮にも現代の「生身」の女性を対象として論じるとしても、そこには宗教と神話が密接に密やかに関わっているものであることを自覚しておかねばならない。もちろんこのほかにも女性の地位を巡って「政治的」また「社会的側面」などが存在することは自明のことであるが……。このように様々な網に捉えられている女性観（あるいは男性観）を論じようとする試みそのものが大変難しいものになるのだが、……。オブテイミスティックに論を進めてみたい。



ところで、優劣の問題を「右」「左」でとらえることができるならば、女性論の端緒はすでに『日本書紀』の「国生み」の段階で見ることが可能である。それはイザナキとイザナミが「天の御柱」を廻って国生みをする場面にある。以下にその場面の記述を引用してみることにする。（下線、または傍点は筆者）

#### 国生み

イザナギ、イザナミが、天の浮橋の上に立たれて、相談していわれるのに、「この底の一番下に国がないはずはない」とおっしゃって、玉で飾った矛を指し下して、下の方をさぐられた。そこに青海原が見つかり、その矛の先からしたたった海水が、凝り固まって一つの島になった。これを名づけてオノコロジマという。二柱の神はそこでこの島にお降りになって、夫婦の行為を行って国土を生もうとなされた。そこでオノコロジマを国中の柱として、男神は左より回り、女神は右から回った。国の柱をめぐる二人の顔が行きあった。そのとき、女神が先に唱えていわれるのに、「あうれしい、立派な若者に会えた」と。男神は喜ばないでいわれるのに、「自分は男子である。順序は男から先にいうべきである。どうして女がさきにいうべきであろうか。不祥なことになった。だから改めて回り直そう」と。そこで二柱の神はもう一度出会い直された。

この度は男神が先に唱えて「ああうれしい、愛らしい少女に会えた」とおっしゃる。そして女神に尋ねられて「あなたの体にどんなになったところがありますか」とおっしゃる。答えていわれる。「私の体に一つの雌のはじまりというところがあります」と。男神がいわれる。

「私の体にもまた雄のはじまりというところがあります。私の体のはじめのところ、あなたの体のはじめのところに合わせようと思う」とおっしゃる。そこで陰陽が始めて交合して夫婦となった。

子が生まれるときに、まず淡路洲（あわじのしま）が第一番にうまれたが、不満足な出来だった。そこで名づけて淡路洲（吾恥島＝あはじしま）という。それから大日本豊秋津洲（大和）を生んだ。つぎに伊予の二名洲（四国）・・・これによって大八洲の国の名ができた。<sup>(5)</sup>

問題となるところは、初めて生まれた子が蛭子であり、不満足な子であったために二人の神は天に昇り天津神にお伺いを立てたところ、初めにイザナミが国中の柱を「右回り」にまわり、男神が左回りに廻り女神の方から男神に声をかけたためだと天津神は太占で占い、「女性が先に言葉をかけた」ことがその原因と言われ、再度繰り返すことを指示されたところにある。

そしていつがよいかを占って再び降った。二柱の神は改めてまた柱のまわりを回った。男神は左から、女神は右から回って出会ったときに男神がまず唱えていわれた。「おや、なんとすばらしい少女だろう」と。女神が後から答えて「おや、何とすばらしい男の方ね」と。その後で同居されて子を生まれた。大日本豊秋津洲となづけた。・・・＜中略＞・・・これを大八洲の国という（宇治谷本 p21）

柱の周りを回る方向は初めとは変わらないが、「右の優位性」と言うことを考えると右に向かって進んで行かなくてはならない女性の方が劣っていると考えることができる。しかし、初めの声掛けが男性に委ねられたことには注目しておきたい。この「国生み」の記述は書によって微妙に異なっているが、問題としたいところは「国中の柱」をイザナミ、イザナキの二柱の神々が右回り、あるいは左回りに廻ると言うところと、女神が先に声を発するか、男神が先に声掛けするかというところにある。しかし、エルツ<sup>(6)</sup>の研究によれば「右」と言う方向には知的正確さ、良識、正しさが秘められ、神聖で、普通な、また善良な力があり、すべての効果的な活動の原理、良く、好ましく正しいすべてのものの源泉があるのに対し、左には、俗、不浄なもの、弱、無能、また邪悪な恐ろしい存在の漠然とした表象がある。この優劣の意識は英語の世界に marry with the left hand（身分の低い女と結婚する）などの表現に見ることができる。エルツのこのような説をそのままこの論で認めることができないうにしても、日本神話の中でも右の優位性という概念をはじめから否定していくことができないうと言っている。すくなくとも、イザナキ、イザナミの「国生み」に関連して彼らの立つ位置、そしてカグツチを生んで

黄泉の国へ行ってからのことを考えあわせてみると彼らの廻る方向性には大きな問題が秘められていると言う事ができる。『書紀』ではわざわざ二人の廻る方向を示し、さらに男神が初めに声をかけなかったことが蛭子を生む原因であったと天津神に占わせ、神々の過ちを明確にすることによって、彼らの廻る方向性、声掛けの順序を明確に意識化させている。柱の周りを回る方向性は女神が「右」であり、男神が「左」に廻り、初めの声掛けをさせる辺りは女神よりも男神の方に優位性がおかれていることを暗示していると考えられる。それは、女神が右に進むこと、そして男神が左に進むことによって示されていると言える。『書紀』に記されていたように女が主導権を取ってはいけないのかも知れない。初めに女から言葉を口にしてはいけない理由は何も述べられていないが、男と女の間柄に秘められている何らかの約束事と理解できる。この、後先という順序の問題は現代においても我々の意識の隅にどこかでずーっと引きずって来ているかのようである。

I love you I love you

さきに口に出すとタブー

I love you I love you

女からならなおタブー

I love you I love you

傷ついてみて知るタブー

I love you I love you

弱みを握られるタブー

追われだすと逃げるのは男の正体<sup>(7)</sup>

中島みゆきの「夢みる勇氣」というこの唄は「国生み」から「千叟の岩（黄泉とこの世の境）」までの男神と女神の姿を現しているように読めてしまうのは行き過ぎであろうか……。しかし、『書紀』でも女から先に口にすることがタブーにされたことを考えあわせてみると、このあたりの問題は以外に古くから現代にまで続いている無意識の表象と理解することが可能かも知れない。

弱みを握られたくない、と言う感覚は女性特有のものとは限らない。しかし、異性に追われだすと逃げるのは男の持って生まれた性分であろう。すでに黄泉の国でイザナキは「見るな」という禁を破り、見てはならないイザナミの姿を見ることによって八人の世津日狭女（あるいは世津醜女）に追われ、あの世からこの世に逃げ返ったが、ある意味においてイザナミは弱みを握られたものとして理解することができる。

互いに求め合う存在でいたとしても、ある一定の感情、あるいは約定を越えたときそこにはカタストロフィーが生じてくる。それがここで言うところの「逃げる」と言う行為に該当しよう。しかし男が逃げるのはその「相手」からなのか。それともその「相手」が仕掛けた世界からなのか、それが問題になってくる。男は女の理想とする世界の中に安穩と暮らすことができない、それは冒頭の「旅人の詩」<sup>(6)</sup>にも見ることができる。また男の考えを女は理解できないし、さらに男も女が抱く世界を受け入れることができないことになる。つまり、「旅人のうた」にみるように視線は互いにすれ違い、それぞれの故郷を見ているからである。

★★★★

男の側から女の心理を唄ったものに松山千春の次のようなものがある。

#### 銀の雨

これ以上私が そばに居たなら  
貴方がだめに なってしまうのね

貴方のそばで貴方のために  
暮らせただけで幸せだけど  
せめて貴方のさみしさ少し  
わかってあげれば良かったのに

ごめんと私にしてくれたのは  
貴方の最後のやさしさですね  
いいのよ貴方について来たのは  
みんな私のわがままだから

この松山の詩の最初のフレーズをだけからでも、女性に縛られている男の姿が浮かび上がってくる。

これ以上私が そばに居たなら  
貴方がだめに なってしまうのね



「だめになってしまう」男が悪いのか、それとも「だめにしてしまう」女が悪いのかという問いも可能であろうが、「だめになってしまう世界に浸ってしまっている」ことが問われてしかるべきではないかと考えたい。また、これが男の作った詩という点から考察するとそこには女性に対する独自の視点があることは否めない。それは、多分「男」が「男」として存在するために必要な要素がこの詩で言う「私」の存在故に奪われてしまうことになるからであろう。ならば、男は一人で自分の世界に歩き出せばよかったのではなかったか？とすることになるが、「私」の存在故に歩き出せず、また「自分から」発言できない男の持つ弱さを指摘することはたやすい。つまり、それは男にとって「都合のいい」相手で居つづけさせるズルサかも知れない。そして、相手に「身を引かせ」るように仕向けようとしている存在であることを物語っている。ある意味で熊野詣での帰路に必ず立ち寄るという約束を反故にした『道成寺縁起』の僧侶「安珍」と彼との約束を信じて待っていた若い娘「清姫」の姿をここに重ねてみていくことも可能にする。

たしかに「男と女」と言う存在は互いを求めることによって心の中の空白を埋めようと空しく努力をするわけだが、そこには

貴方のそばで貴方のために  
暮らせただけで幸せだけど  
せめて貴方のさみしさ少し  
わかってあげれば良かったのに

と言うフレーズに見ることができるような根本的とも言っている差異が存在することを認めておかななくてはならない。それは、優しく包み込もうとする「母性的存在」としての「女」に対し、束縛を嫌い自分の世界を目指そうとする「男」という差異が存在する。「男」に取っての理想は先の歌詞の

貴方のそばで貴方のために

生きようとする姿勢ではなく、自分なりの生き様の追求を示せる生き方と考えて良いことになる。ここで言う「自分なりの生き様」とはまさに「我が儘」の一言につきるであろう。そこには何の約束も存在せず、ただ疲れたとき自由に戻ってこれる「場」としての「女」を求めていることになる。そういう意味では「男」として望ましいのは「都合のいい存在としての女」とすることになる。だが、ほぼ同じ内容を女の立場で中島みゆきは次のように唄って見せている

よりそいあって暮らすことがあなたのためにはならないこともある

しでかして来た過ぎた日々が私を許しはしないらしい

今日までの愛情に報いて出来ることはただひとつ

突然の裏切りと見えるしかなくても  
もう逢わないもう呼ばないあなたと他人になるわ  
たとえ離れても心は変わらない

せつなさに疲れて息がとまっても  
誰でもいい側にいてと迷いにまかせたひと頃があった  
忘れ捨ててほしいならと忍び寄って来るあの頃の気配  
狙うのは私だけでいいおびき寄せて遠ざかるわ  
あなたには何者も触れさせはしないから  
あなたには裏切りと憎まれてもいいから  
たとえ離れても心は変わらない  
せつなさに疲れて息がとまっても  
狙うのは私だけでいいおびき寄せて遠ざかるわ  
あなたには何者も触れさせはしないから  
あなたには裏切りと憎まれてもいいから  
たとえ離れても心は変わらない  
せつなさに疲れて息がとまっても<sup>(9)</sup>

ここには自分の世界の中に男を捉えて離そうとしない女の力がある。

「あなたには裏切りと憎まれてもいいから  
たとえ離れても心は変わらない」

という表現にはまさに男は自分のもの以外の何者でもないという視点のあることが判る。これを母性的視点と表現すると理解しやすくなる。畑田国男は

日本の男女関係は伝統的に母と子の関係で、大人になっても男は彼女に「母」をみる、その懐で甘えたがるのが「精神分析的な人間理解」なのだという<sup>(10)</sup>。

このように女を内面から支えているのは損得勘定でも、何でもない。ただ中島みゆきによれば、それは先に引用した「彼は違う」という視点で「夢みる勇氣」を持つことになる。これは次の段階で男に対して「私の子供になりなさい」という要求を示してくる。

涙を見せてはいけないと教えられたのね  
そんなことない そんなことない そばに誰がいるのか次第  
男には女より泣きたいことが多いから  
あなたが泣くときはわたしは空を見よう

あなたが泣きやめばふたりで空を見よう  
もう愛だとか恋だとかむずかしく言わないで  
わたしの子供になりなさい  
もう愛だとか恋だとかむずかしく言わないで  
わたしの子供になりなさい<sup>(11)</sup>

筆者が彼女の唄に惹かれるのは、その詩を織りなす言葉が神話的世界を象徴していると考えられるところにあり、その象徴性に惹かれて彼女の用いる言葉に心が惹かれるのである。その最たるところはこれまで『書紀』などの国生みの部分で触れたように「愛の言葉」を女の側から言ってはならないと唄っているところなどに見ることができる。と、同時に「あなたには何者も触れさせないから」という表現するなど黄泉の国のイザナミを想起させるものものもある。しかも彼女の視点の背景には「母と子」に喩えられた「男と女の関係」をも見るのできるのである。

中島みゆきによれば「女」はいつも「男」に夢を見ている事になる。しかも

「でも彼はきっと違う」

と常に想おうとしている。しかし、この夢は多分男にとって味方する物ではなく、男にとっても、女にとってもたがいにその根底に有している本質の違いを「女という商売」という表現で、冷たく掘り下げているだけにすぎない。

女と生まれて来たからにゃ 誰も彼もみんな同じ  
 男と生まれて来たからにゃ 誰も彼もがみんな同じ  
 どんなに気どってもお見とおし  
 夢の木の実はどこにある  
 それを売るのが仕事よ  
 SWEET POISON、SWEET POISON 夢を見せてあげる  
 SWEET POISON、SWEET POISON 嘘をついてあげる<sup>(12)</sup>

★★★★★

「女」が決して「男」にとって都合のいい存在であるとは限らない。女の本質を守るために、女であろうとするために、男に夢を見させるために嘘をつく、しかしその嘘は「女」が「女」として存在する証でもあると言って良い。中島みゆきの唄はある意味で叶えられない「女」の

幸せを追求しているといえる。しかも、根本においてはたがいに相容れない存在として「男」と「女」が意識されていることが伺える。相容れない、それにもかかわらず求め合わなくてはならないものであることを彼女は「炎と水」と言う詩で唄っている。

炎と水<sup>(13)</sup>

あなたは炎の大地を歩き 途切れた未来へ注ぎ込む者  
けれども情けの深さのあまり 己れを癒せず凍えゆく者

私は凍った大地を歩き 凍てつく昨日を暖める者  
けれども思いの熱さのあまり 己れを癒せず身を焦がす者

Flame & Aqua なんて遠い者たち  
私たちは互いに誰より遠い  
Flame & Aqua なんて同じ者たち  
いちばん遠い者がいちばん近いの

私はあなたを傷つける者 誰よりあなたを傷つける者  
けれども唯一癒せるすべを それとは知らずに持っている者

Flame & Aqua なんて遠い者たち

私たちは互いに誰より遠い  
Flame & Aqua なんて同じ者たち  
いちばん遠い者がいちばん近い  
Flame & Aqua 互いから生まれあう  
あなたがいなければ  
私はまだ生まれていないような者

あなたがあなたになればなるほど  
私が私になればなるほど  
互いは互いが必要になる 誰から教えられることもなく

Flame & Aqua あなたは一途な水  
 私たちの行方を指し示す者  
 Flame & Aqua 私は揺れる炎  
 私たちの行方を照らし出す者  
 Flame & Aqua 求めずにいられない  
 私たちは  
 あまりにひとりでは担い過ぎる炎と水

たがいに遠い存在であることを自覚しながら、互いが互いに相反する存在でありながら相手が必要としているという事実、それは「女」と言う存在から「自分」あるいは「個人」と言う意識を有し始めたときに気付かれるものといえる。この「炎と水」には妻を失ったイザナキの新たなる国生みの姿と、黄泉の国にいて過去に縛られるイザナミを重ねることができる。途切れた未来に凍えながら向かうものと、凍てつく昨日を暖めようとするものという対比は絶対的な矛盾の存在の表明でもある。

「アンテナの街」<sup>(14)</sup>では彼女は次のように言っている

昔あった人たちを型紙にしてこの街の人は  
 同じにならなきゃできそこないだとため息をつく  
 私を呼んでください名前と呼んでください  
 苗字の流れの中にしか見当たらない者じゃなく  
 はるかに流れる血縁の流れ  
 似てない子供を愛してください  
 はるかに流れる血縁の流れ  
 似てない子供を愛してください  
 すれ違ったこともない人を真似して  
 生まれる前から歩くべき道も愛すべき人も決められていた

そこには過去に拘らない存在としての自分を「昔あった人たちを型紙」にし、と言う比喻で拒否し、「私を呼んでください名前と呼んでください」と訴えることによって自立的存在としての女性を描こうとしている。

だが先程から述べてきたようにその背景、あるいは根底に存在する「男女関係」を否定できない弱みがある。自立的な存在になったとき、「男」を見捨てることを厭わない存在としての「女」の姿が顕れてくることは必然と言っても過言ではなからう。

これまでは、いうなれば

「貴方のそばで貴方のために生きる」

ことしかできなかつた存在が「男」を見捨てることのできる訳を知ることができるからである。それは、「彼は違う」きっと私から逃げない存在（「夢見る力」）と想うことであり、互いに癒しあう術をそれとは知らずに知っている事に気がつくからである。それは矛盾しながらも調和する存在としての自分を自覚しているからと言える。もはや何者にも囚われない存在としての自分を見いだしていることになる。普遍的価値観など存在しないことを示し、絶対的なものとしての自分ではなく、相対的存在としての自分を浮き上がらせてくるのである

「何も知らないものはさすらうものばかり」（旅人の詩）

と彼女は見ている。そして幸せと言うものを次のように唄うことによって暗示してくる。

糸<sup>(15)</sup>

なぜめぐり建うのかを  
 私たちはなにも知らない  
 いつめぐり逢うのかを  
 私たちはいつも知らない  
 どこにいたの 生きてきたの  
 遠い空の下 ふたつの物語  
縦の糸はあなた 横の糸は私  
織りなす布はいつか誰かを  
暖めうるかもしれない

なぜ生きてゆくのかを  
 迷った日の跡のささくれ  
 夢追いかけて走って  
 ころんだ日の跡のささくれ  
 こんな糸が なんになるの  
 心許なくて ふるえてた風の中  
縦の糸はあなた 横の糸は私  
織りなす布はいつか誰かの  
傷をかばうかもしれない

縦の糸はあなた  
横の糸は私  
逢うべき糸に出会えることを  
人は仕合わせと呼びます

ここでは女性が異性（男性）に対峙し、異性に抱く複雑な感情の絡み、愛憎の表現を通してこの問題を俎上にあげ、考えてみたい。それは男性側から見る女性観と、女性側から見ている男性観を浮かび上がらせてくることになるからである。しかし本質において女性が「生む胎」

であると言うことと男性がそれに関わる存在であると言うことは無視することはできない。常に互いに補いあい、反発しあいながら存在せざるを得ないのは自分の存在によって、「逢うべき糸」に出会い、いつか誰かの傷をかばうかも知れないと言う期待に基づいているといえる。

本田和子は「開かれ、生成する身体」を持ちながらも「生む胎」である存在としての自分を意識する前段階の女性を次のように位置づけている。

男たち一般とは異なった位相で有機化され、異なった責の間われ方をするようになったと、見るべきであろうか。女と子どもは、何故か、現世的な倫理や徳目の網の目で掬い取られず、そして存在そのものにかかわる持性において、専用の地獄を用意されたのであった。女と子ども、それは限りなく価値の体系から逃れ去るものであったらしい。<sup>(16)</sup>

また、汎文化的な女性の劣位が、その身体の生理構造とそれに基づく生殖と養育の営みに由来するとはしばしば試みられている議論であろう。より正確には、女体と営みそのものではなくそれに仮託される意味とそれに由来する位置づけに負う、とこそ言うべきだろうか。すなわち、「文化」が「自然」を超越するものとして語られる限りでは、これら女体の特性は「自然」により近く、そのゆえに、「文化」と同一視される男性の営為を、優位に押し上げざるを得ないというのだ。「自然」と結び付けられるにせよ、あるいは「動物的」と定位されるにせよ、いずれにしても、整除されていく秩序社会にあっては、女体はその特性を「逸脱」において顕在化されざるを得ない。そのゆえに、秩序の側が女体と取り結ぶ関係は、自ずから多義性を帯び、矛盾に満ちたものとなるだろう。<sup>(17)</sup>

★★★★★★

やはり中島みゆきの唄うように矛盾に満ちたものであることを認めなくてはならないようである。本田は「若い女性」からのメッセージを次のように解説している。

女人、とりわけ少女と呼ばれる若い娘ほど、公の言説になじみにくい者はない。恐らく、それを形作る規範言語なるものが、彼女らと無縁の地平で組み立てられているからであろうか。少女たちは、常に変貌をくり返し、不断の動線によってその輪廓を特定させないのだが、その輪郭不安定という形に己れを閉じたまま、他性を受け入れない。一方、規範言語は、語の同一性によってものごとを固定し秩序だてつつ、その静的な固定性のゆえにあらゆる他者との関係の基盤となる。こうした相反する属性のゆえに、両者ともに互になじみ合うこともなく、それぞれに無縁、無関心にあり続けたのではなかったか。

しかも、「産む」という営みを拒んで、秩序の中に未だ位置づかぬ「処女なるもの」は、秩序社会から逸脱して「何ものでもないもの」のままに、枠組みのすき間に浮遊している。

従って、そんな彼女たちが、時に何かしら眩いたり謳い上げたりすることがあっても、それは、単なるきれぎれの声としてのみ宙に漂い、やがて消えていくのが常であった。彼女らの声が、稀には公に掬い取られることがあったが、それらは、天災の予兆として、あるいは政変を告げるものとして、常ならぬ声と読み解かれ、日常性の回復とともに忘れられるのが常であった。従って、過去の時間の中に彼女らの言動を探ることは、川を越えていった旅人の足跡を水の面に辿る試みに似ている。目に捉えられるのは、たださらさらと流れ去る透明な水の流れだけ……。しかし、川のほとりに住まいする人々の中で、時として旅人の伝承が語り紡がれるように、彼女らの消息が、極く稀に文学的言説の上に浮かび上って見えることがある。ただし、「語られるもの」として……。王朝時代の特別な才女たちを別として、彼女らは、みずから「語るもの」としてあらわにすることはなかった。そのゆえに、少女なるものが言説の世界に浮上するとしても、それらは、文字やことばの持ち主によって掬い取られ、輪廓づけられた、その限界の中においてである。恐らくは、それらが書き記されたとき、既にして彼女たちは、その行間から溢れ出し、行方も知れぬ彼方へと漂い消えていきつつあったことだろう。少女なるものについて、こうして筆を運んでみようとするとき、私の筆の間からさえ、絶えず漂い出していく彼女たちの浮遊性に、私もまた、空しく筆をとめる。<sup>(18)</sup>

しかし、中島みゆきは本田の言うように枠組みの隙間に浮遊し秩序社会にいる「女」になることを否定しようとしている。いつか彼女の唄は「天災の予兆として、あるいは政変を告げるものとして、常ならぬ声と読み解かれ」て行くかも知れない。

「北の国の習い」<sup>(19)</sup>

離婚の数では日本一だってさ 大きな声じゃ言えないけどね  
 しかも女から口火を切ってひとりぼっちの道を選ぶよ  
 北の国の女は耐えないからね 我慢強いのはむしろ南のおんなさ  
 待っても春など来るもんか  
 見捨てて歩き出すのが習わしさ  
 北の国の女にゃ気をつけな  
 待っても春など来るもんか  
 見捨てて歩き出すのが習わしさ  
 北の国の女にゃ気をつけな



吹雪の夜に白い山を越えてみようよ あんたの自慢のしゃれた車で  
 凍るカーブは鏡のように気取り忘れた顔を映し出す  
 立ち往生の吹きだまり凍って死ぬかい  
 それとも排気ガスで眠って死ぬかい  
 待っても春など来るもんか  
 見捨てて歩き出すのが習わしさ  
 北の国の女にゃ気をつけな  
 待っても春など来るもんか  
 見捨てて歩き出すのが習わしさ  
 北の国の女にゃ気をつけな

このような詩が女性の立場から作られたことは大変興味深いと言うべきことだろう。それは、「女」と言うものに対して課せられていた重石がとれていることを示しているからである。「待つ」よりも「求め」で行こうとする姿勢はリリス的というべきであろう。

北の国の女は耐えないからね  
 我慢強いのはむしろ南のおんなさ

貞淑さと我慢強さを男の側からの理想として押しつけられていた「女」がある意味において男性陣に対し「待つ」ことを拒否した宣戦布告の詩と読みとることをこれは可能とするが、一方において本田の言うように若い女性たちの声が一時的に「天災の予兆として、あるいは政変を告げるものとして、常ならぬ声と読み解かれ、日常性の回復とともに忘れられる」のかも知れない。

このように書いて気づかされたことは、「女」と言うものをどのように認識するかと言うことである。本田和子の言うように「開かれ、生成する身体」を持ち「生む胎」としての自分を意識する女性と、その前段階の女性、「生む胎」として機能する以前の少女とに分けて女性を捉えなくてはならないことである。

#### 註

- (1) 中島みゆき『中島みゆき全歌集 II』朝日新聞社 1998 p236
- (2) 前掲書 p140
- (3) アダムとともに土よりつくられた最初の女性で、彼の妻。淵源(えんげん)はバビロニアの民間伝説にさかのぼり、ユダヤ教典タルムード中に見いだせる。預言者エレミアの処女の母ベン・シラが語ったと言われる話では、リリスはアダムとの間に多くの悪魔を生んだがアダムに従わず、のろいの言葉

とともに紅海に飛び去って隠れるが、3人の天使が主の命令で捜し出し、毎日彼女の子ども100人を殺すと脅迫する。リリスは許しを請い、その代りに人間の赤子を苦しめる力を得る。天使の名まえが書いてある家には近寄らぬことを誓ったので、紀元前7、8世紀のヘブライヤカナンの魔除けの呪文にはその記録が残っている。旧約聖書の注解書ミドラシュには、アダムはピズナイという名のリリス(悪魔)との間に男女の悪魔を生んだとあり、ユダヤ神秘派の教典《ゾーハル》には、深い水底から生まれ出たアダムの前妻とある。イブがつくられると天使に追放されて男性を憎み結婚を妨げたり、生まれる子どもを殺して魂と肉を食べる夜の悪魔となったという。リリス伝説が固定されたカバラでは女悪魔となっている。ユダヤでは4人の悪の母の一人。この伝説は各国に伝播(でんぱ)し、さまざまな特質をそなえて文学に登場しており、ゲーテの《ファウスト》(第1部)、D. G. ロセッティの詩《リリス》ではアダムの最初の妻で金髪の美しい誘惑者とされ、G. マクドナルドの長編《リリス》では猫やヒョウやカラスに変身し、子どもを食べる地獄の女王となっている。

井村 君江(平凡社・デジタル百科事典)

この姿は仏教の中に出てくる鬼子母神とも類似すると言っているであろう。

鬼子母とは、鬼神槃荼(はんじやか)の妻が、1万の子(500人、1000人の子とする説もある)の母であるところの呼称。サンスクリットのハーリティー(訶梨帝)の漢訳。訶梨帝母(かりていも)ともいう。鬼子母ははじめ邪悪で、他人の幼児を奪い食べていた。仏はこれを戒めるため鬼子母の一子を隠した。悲嘆限りない鬼子母が仏にその子を探ねると、子を失う悲しみは、鬼子母が食べた子の母の悲しみであると、鬼子母を責め戒めた。ここにおいて、鬼子母は仏に帰依し善神となり、鬼子母神としてあがめられるようになったという。インドでは、とりわけ子授け・安産・子育ての神としてまつられ、日本でも密教の盛行にともない、小児の息災や福德を求めて、鬼子母神を本尊とする訶梨帝母法が修せられたり、上層貴族の間では、出産のおり、安産を願って訶梨帝母像をまつり、訶梨帝母法を修している。その形像は、天女像で、左手で懐に一子を抱き、右手に吉祥果(きつしようか)(ザクロが多い)をもつ端麗豊満な姿態。いっぽう、《法華経》には、十羅刹女(じゅうらせつによ)とともに鬼子母が、法華信奉者の擁護と法華信仰弘通を妨げる者の処罰とを誓っている。鬼形に総髮合掌形と有角抱児形があるが、中山法華経寺系の修法が中心になったため、総髮合掌形が広まった。さらに旧来の天女形も作られ、鬼形は破邪調伏、天女形は安産子育てとされた。

高木 豊(平凡社・デジタル百科事典)

これら二人の性格など検討しなくてはならない問題は多々存在するが、ここでは鬼神的性質、さらに多産と言う点において共通することに注目しておきたい。

(4) 水田珠恵「女性解放」(平凡社・デジタル百科事典)。

(5) 訳文は宇治谷 孟『全現代語訳 日本書紀』講談社学術文庫833による。神代 p19。

他には、日本古典文学大系67『日本書紀』上 岩波書店 1967年第1刷、1986年第21刷 p80 f。

日本思想大系1『古事記』岩波書店 1982年第1刷、1985年第5刷 pp21~23が存在する。

ここでは現代語訳は宇治谷本に倣うことにする。特に記述しない場合は宇治谷本を用いていくことにする。

なお、『書紀』の一書(第一)の他の記述については宇治谷本ではpp20~22に

日本古典文学大系では pp80~86 に一書の記述を見る。

日本思想大系『古事記』には「国生み」の記述でも女神は右に廻ることになっている。

- (6)『右手の優越』エルツ、ロベール (Robert Hertz) 訳：吉田禎吾他 昭和60年6月20日初版第2刷  
発行 垣内出版 によると

《右》と《左》の語の意味を考えてみると、同様な対比が認められる。《右》という語は物理的な強さと《器用さ(dexterite)、知的《正確さ》、良識、《正しさ》、精神的潔癖、幸福、美しさ、法的規範の観念を現わすのに用いられるのに対し、《左》という語はそれらの反語を現わすことが多い。それらたくさんの意味の統一をはかるために、《右》という語はまずわれわれの利き腕を意味し、そのつぎに「それに自然に結びついている強さと器用さの特性」を現わすようになったと普通想像されており、そこから精神や心情に関する種々の類似の特性に敷衍されるようになったとよく推測されている。しかしこれは独断的な解釈である。右を現わす古代のインド・ヨーロッパ系の語がまず最初にもっぱら物理的な意味を持っていたことをはっきりと確証させるものは何もない。われわれの(フランス語の) droit (右の意) やアルメニア語の adj ように比較的最近できた語は身体の片方の意味に用いられる前に、通常でたしかかな方法で目的にまっすぐ進む力の観念を現わし、それは、曲りくねった、斜めな、できそこないの方法で進むのと対比された。事実、ヨーロッパの言語は進んだ文明の所産であるために、この語の多様な意味はそれぞれ異なっている。比較研究によっていろんな意味の由来する語源にさかのぼってみると、その起源において、それらすべてを網羅するひとつの観念に融けあっているのがわかる。すでにふれたようにこの観念によれば、右には、神聖で、普通な、また善良な力があり、すべての効果的な活動の原理、良く、好ましく正しいすべてのものの源泉があるのに対し、左には、俗、不浄なもの、弱、無能、また邪悪な恐ろしい存在の漠然とした表象がある。物理的な強さ(あるいは弱さ)は、そこではいっそう広く、深い性質に由来するただひとつの特殊な要素に過ぎない。p149f

同じように重要な調和によって、身体の左右両側と空間の領域とが結ばれている。つまり右は高さ、天界、空を表わし、左は下界、大地に属している。最後の審判の絵で、キリストは右手をあげて神に選ばれた人びとに彼らの高貴なすみかさし示し、左手は地獄に落ちる人びとに彼らをおもこもうとしている地獄の大きく開かれた口を示している。右が東か南に左が北か西に結びつく関係はいっそう緊密で不変であり、多くの言語で同じ語は身体の左右とともに方位を意味しているほどである。世界を、明るい部分と、暗い部分との二つに分ける軸は、人間の身体も光と闇の部分とに分ける。左右の区分は人間の身体の領域を越えて宇宙全体を包むのである。

非常に広く見られる観念によると、少なくともインド・ヨーロッパの多くの地域では、その中心部に約櫃である祭壇がある。そこに神々が降臨し、恵みを四方に与える。囲いの内部は秩序と調和が支配しているが、その外部には、不浄な因子が満ち溢れ、混乱した力が横行し、法もなく、限界もない広漠たる夜がひろがっている。神聖な空間の周囲には崇拜する人たちが、内側の方に右肩を向けて神聖な中心部のまわりで儀礼を行なうのである。内側の方からはすべての希望をいだき、外の方からはすべての恐れを感ずる。右は「内なるもの」、有限、たしかかな福祉と平和であり、左は「外なるもの」、無限、敵意あるもの、永遠に続く悪の脅威なのである。

このような叙述から右側と男性が同じ性質のものであり、左側と女性も同じ性質を帯びていると推論される。この点についてわれわれはただの推測で述べているのではない。p152。

この記述を考えれば、日本神話に見るイザナミ、イザナキの動きはさらなる問題を提起することになる。また、右左の示す世界観は複雑な価値体系を示してくる。

- (7) 中島みゆき 前掲書 p192。
- (8) 前掲書 p236。
- (9) 前掲書「愛情物語」 p304。
- (10) 畑田国男『「妹の力」社会学』 株式会社コスモの本 1991 p148。
- (11) 中島みゆき 前掲書「私の子供になりなさい」 p314。
- (12) 前掲書「女という商売」 p295。
- (13) 前掲書「炎と水」 p140。
- (14) 前掲書「アンテナの街」 p212。
- (15) 前掲書「糸」 p166。
- (16) 本田和子『少女浮遊』1986 第1刷 1989第2刷 青土社 p21f。
- (17) 前掲書 p56。
- (18) 前掲書 p139f。
- (19) 中島みゆき 前掲書 p111。